

群馬詩人クラブ

会報

No. 287

編集／群馬詩人クラブ幹事会

代表／平野秀哉

発行／群馬詩人クラブ事務局

〒370-3102

高崎市箕郷町生原1730

龍昌寺

印刷 三協印刷

振替番号 00140-8-728969 狩野務

主な記事

- クロニクル『東国』 川島 完…2
- 第42回 朔太郎忌 新井啓子…3
- 書評……………4
- 白井三夫『思ひ川』 大塚史朗
- イベント報告……………4~7
- 第51回 群馬県文学賞受賞記念講演
- 伊藤信一
- 熱帯雨林と空つ風 高田美美
- あすなる忌見聞録 福田 誠
- 大手拓次『薔薇忌』 磯貝優子
- 年刊詩集原稿募集……………5
- 現代詩作品展案内……………8
- 伊東静雄賞作品募集……………8
- 受贈詩誌御礼／編集後記……………8

いまも心に生きる暮鳥

山村暮鳥生誕百三十周年・没後九十年

松田孝夫

暮鳥が没して九十年が過ぎた。けれど暮鳥ほど移り住んだそれぞれの地域のなかで、いまも世代をこえて人々の心に生き続けている詩人は希であろう。

幼少の頃の不運、晩年の病苦と貧困など、苦悩を超えて生きる者の強さと優しさ、自然や人々への愛を詩いつづけた詩人の生き様に共感するからである。

節目の年にはゆかりの深い各地で記念事業がくり広げられている。特に生誕百三十周年は、暮鳥の生誕の地・群馬の上毛新聞や旺盛な文学活動を繰り広げた福島福島の福島民報、終焉の地・茨城の茨城新聞の地方紙三社が共同企画『雲と折りの詩人』の特集を組み、かつてない広範な規模で、暮鳥の人と作品を掘り起こした。各地、各団体の記念事業も精細に

報道され、記念事業の集大成として画期的な年であった。

生誕百三十周年の今年、生誕の地の高崎市文化協会群馬支部が、市の助成を受けて新しい試みの記念事業を企画している。

暮鳥の詩碑十五基（うち二基は同一の詩）に刻まれている十四編の詩を英訳して、原詩と併記し、詩碑の写真とともにその地に詩碑が建立された経緯や、詩の解説を載せた小詩集『おうい雲よ』を刊行する。外国の文学に視野を向けた暮鳥にとって斬新な試みである。

掲載される詩は、『三人の処女』から「独唱」『聖三稜玻璃』から「風景」、『風は草木にささやいた』から「父上のおん手の詩」と「老漁夫の詩」、『梢の巣にて』から「山上にて」、

「土の精神」から「黒い土」、『雲』から「ある時」「梅」「ふるさと」「雲」など七編、「月夜の牡丹」から「月」を、暮鳥の初期から晩年の七詩集から網羅している。大きく詩風を変えた暮鳥詩の特徴も理解されよう。

この詩集は高崎市内の小学六年生と中学三年生全生徒に配布し、小中学生から暮鳥詩のイメージ絵画を募集する。詩の絵画性を理解する上で新しい試みである。

八月三十一日には、シンポジウムや、暮鳥詩曲も演奏する群響の演奏、暮鳥の母校・堤ヶ岡小学校生徒の暮鳥詩朗読など、多角的に取り組む企画である。

暮鳥のゆかりの場所も関係者によって整備された。高崎市棟高町の生家が改修保存され、いわき暮鳥会の協力で庭に詩碑が建立された。暮鳥が生涯をとじた大洗海岸の鬼坊裏別荘跡地も、大洗暮鳥会員によって整備され詩碑が建立されている。

群馬の最初の詩碑も茨城との友好で笠間の御影石が贈られ建立されている。暮鳥を介して、生誕の地・群馬と終焉の地・大洗が「文化友好の町」の契りを結び親しく交流が続いているのも、記念事業が地域を越えて連携して行われているのも、暮鳥が広く愛され親しまれてきた所以であろう。

今年の暮鳥文明の命日に開かれる「暮鳥文明まつり」には、詩作品を高崎市全域の小中学生と関係高校生を対象に募集する。

高崎市や県立文学館、学校、文化友好の町遺族などの協力を得て、新しい試みがどのように受け止められるか期待される。

クロニクル 『東国』

川島 完

一九六九年スタートのときは、「太田詩人クラブ」と名のり、地域に根づいた詩活動をしていた。むろん、群馬詩人クラブの支部ではなく、独立した団体である。例会を毎月開き、詩誌「ある流れ」を季刊で発行し、会報「接点」（4〜6頁）は月刊であった。太田という地名を冠しながらも、それは緩やかに群馬東部くらいの認識だったように思える。しかしこの地域性は、集会の設定等には都合良く、詩画展や朗読会のイベントも比較的容易にこなせた。このことはヒステレヒスの財産になっていったが、時とともに会員が群馬はおろか栃木埼玉にまで拡大し、もう小回りの利く団体ではなくなった。

必然的に会の母体構造の改変を迫られ、「東国の会」とした。ネーミングからして、箱根の東の集まりだろう程の印象を受けるが、上州は大和王権に呼応するように古墳の多い土地で、昔から東国文化などといわれてきた。それに重ねる思いも少しはあるが、それより中央でも擬似中央でもない辺境の自由さを、求めていたように、今では考えられる。綱領で謳うほど積極的ではないけれど、詩の書き手即読み手という図式を、超えたかった気持ちがあった。その具体例が、詩を書く人も書かない人も含めたグループであり、最低の義

務は会費を払うことだけ。会の代表も主宰も会長も置かず、世話役として編集人と発行所（事務局）があるに留めた。従って会の入退会もかなり自由で、詩人の名を借りた胡散臭い者もいて、原稿だけはせつせと送り最低の義務は履行せず、退会する奴もいた。また原稿の寄せ方もさまざまで、二万字の短編小説ほどの分量から、百字に満たない詩まであって、誰が編集しても割付に苦勞する。しかし編集人というのは、そんな物理的処理の問題ではなく、いい作品をどう曳きだすかの方が重要であって、そこから詩誌の姿勢や方向性が、自ずから定まってくるはずである。

そのサンプルとしたのが、創刊号の「編集後記」と思えるので、以下抽出する。「誇っていいわけではないが、宣言も主張も準備していない。その問題意識はやがてそれぞれの胸のうちに育てられていくだろう。」と、まあ、旗印のないことを旗印にするような態度であった。そのうち群馬県文学賞の受賞者がポツポツ現れ、彼らは既に個人詩集を刊行しており、会員の単行詩集出版の話題が、例会の席を賑わす。季刊詩誌・月刊会報の発行を支えていたのは、二人の印刷業を営む会員だったが、もう一人同業者がおり、その人が詩集担当を引き受けてくれた。安価にあげるため装丁・版型・頁数・集金法・発行順を事前に定め、毎月個人詩集が「月報」（八頁）つきで出版されていく。「群馬詩人選集」と銘打ち、十六人の会員が参加し、そのうち十一人が処

女詩集であった。

詩誌を「東国」と改題したのは、一九八四年の46号からで、全会員三十六人のうち太田在住者は6人になっていた。この空間のひろがり、前のシリーズ詩集を越えた本格的個人詩集発刊の要望も生まれ、「東国叢書I」が具現化され、個々人とはいえないかなりの反響があった。このあたりを見ていたのか、書かない詩人といわれていた崔華國が入ってきた。「書けなくたって、金さえ払えばいいんだろう」が最初の台詞だ。しかし、バリバリ書いた。そうこうしているうちに、H氏賞だとの報せを受け、三年後には真下章も受賞し、國峰照子のラ・メール新人賞も話題になった。そんな中でも、川越で小京都気分になったり、廃線と聞いて足尾線に乗ったり、長野・無言館で沈黙したり、新潟・瓢湖で白鳥を見たりと、遊び惚けていた。その究極は八年間続いた「赤城で夜を！の会」だ。

が、この連綿の下で発行元の小山和郎の身体を、病が時々襲う。するとどうしても「東国叢書II」の刊行は後れ、「東国」の定期発行も崩れる。自由さ故、会員になった者は一五〇人を超えるが、創刊からの参加者は今一人もおらず、私の入会した4号以降では井上英明のみである。そして小山の死を迎えた。詩誌を長く続ける意味を時々考える。しかし発表したい人がいる限り、その意義はあろう。現在年二回、必ず合評会を開くことで継続発行している。もう四五年になる。

第四十二回朔太郎忌 朔太郎ルネサンス in 前橋

新井啓子

萩原朔太郎の命日である5月11日(日)、前橋テルサにて第四十二回朔太郎忌が催された。翌日の新聞発表では参加者300人という大盛況で、長い一日となった。まず群馬マンドリンクラブによる演奏、前橋文学館友の会「楽しく歌う会」による朔太郎に因んだ楽曲のコーラスで幕開け。次に群馬詩人クラブ会長平野秀哉氏と友の会会員による朔太郎詩



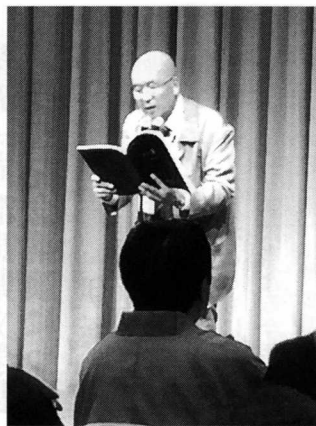
参加者の様子 水と緑と詩のまち前橋文学館提供

の朗読。これらは例年の出し物であるが、今年の広い会場でもよく音が響き、もの悲しくもゆったりしたマンドリンの音色や声に多くの人が聞き入った。

一人目のゲストは芥川賞作家であり詩人であり、女優でありミュージシャンであり、若くして多彩な才能を惜しみなく発揮している川上未映子氏。三浦雅士朔太郎研究会会長との対話では、軽妙な語り口で夭折の中原もと遅咲きの朔太郎を対比。言葉の繰り返しのうっとりする中もと、決死の緊張感や理性が勝って夢を見ない朔太郎という二人の詩人のイメージを語った。また、小説と比べて「詩は作者にも永遠にわからない謎を持つもの」と三浦氏が投げかけると、「詩はただ自由に書くだけではなく、緊張感が必要」と説いた。

もう一人のゲスト、詩人の吉増剛造氏は、三浦氏と朔太郎の写真や声について対話し自作の映像を披露した。吉増氏は朔太郎が生きた場所である前橋・下北沢・鎌倉・伊香保・国定など、自らそこへ出向きそこで朔太郎にまつわる映像を撮っている。今回の映像は、前橋の街をタクシーで移動し、利根川に降り立った時のものである。時代を超えた場の再生が、薄いフィルムに転写された朔太郎の像を通してあわあわと映し出された。細い筋のような木々、押し寄せる川の流れ、フィルムが揺れるたびに一緒に揺れて音をたてる、鈴の音が印象に残った。

閉会后懇親会までは、生家や文学館を巡る



朗読風景

水と緑と詩のまち前橋文学館提供

ツアーが企画され、わずかな時間ながら朔太郎の気配を味わう計らいとなった。続く懇親会では出席者はみな青猫のマスクをつけ、会場は猫町と化す。老若男女、東北からも関西からも会報の記載を見た会員が駆けつけマジックなどを楽しんだ。研究者・詩人に限らず、詩や朔太郎や前橋に関心のある人たちが集まったのだろう。「忌」ではなく、「まつり」であってほしいという故萩原葉子氏の言葉を思い出した。

今年には朔太郎研究会発足50周年の記念の年である。会長就任の三浦氏を始め、研究会や朔太郎忌をバックアップする体制が一新した。50年の歴史の上に、新たな精神や構想が組み立てられ、さらなる活動の原動力となることが望まれる。「前橋は言葉と出会う街」と、萩原朔美氏は常々話し、「言葉の(世界)の人たちが(時代の)道先案内人になる」と三浦氏も熱弁をふるう。詩や朔太郎への熱い思いとうねりを感じた今年の朔太郎忌。来年も期待したい。

白井三夫詩集

『思い川』を読んで

大塚史朗

白井三夫さんが群馬詩人会議に入会したのは93年と久保田穰さんが寄せている〈跋文〉にある。今から21年前だ。もつとずっと前から「夜明け」に書いていたような気がしていた。ほとんど発行ごとに作品を寄せていたからだと思う。59年生まれだから34歳の時からだ。詩の多くは身近な生活の中や思い出から生まれたものだ。長く多くの詩を書く仲間とつきあってきたから直感した。こういう詩を書く人は、生涯書き続けていくだろうと。

白井さんの職場は、伊香保の「グリーン牧場」だ。茨城大学農学部を卒業して、新潟大学大学院修士課程を修了している。

「習慣」という作品に

〈わたしは牛飼いの生活から／引退するの
とになった／二十五年間続けてきた／朝の
搾乳がなくなり／一年が過ぎようとしてい
る〉。が書き出しで、中ほどに〈朝の搾乳
のときは／午前三時半には 家を出て／四
時前には 牛舎に入っていた／搾乳機械の
自動洗浄を入ると／待機場まで 牛を
追ってくる〉。

牛飼いにたずさわって生きてきた人が身近に多くいたから知っている。生きものを飼育

して、暮らしをたてていくのには、それなりの忍耐と生あるものに対する愛がなければ続けられない。それが多くものに通じる生き方になっているのだ。だから詩作品にも現れている。収録作品の多くにそれがうかがわれる。これは日常の生活雑記から離れたものというたつたものにも通じている。

〈サッカーのアジアカップが開かれている
／日本は ハノイで地元ベトナムと戦った
／四万人を収容するスタンドは／ベトナム
の色 赤で染まっていた〉、が書き出しで、
終章の二つ。〈今 ベトナムがサッカーで
／日本と戦っている／アメリカ軍と戦った
ように／高温多湿のグラウンドは／あなたた
ちホームのものだ／今こそ／生きてある
喜びを／遠い国に住む私にも／分かち合わ
せてください〉。
これは「ベトナム」という詩だが、「ペラ
ルーシ」も同様だ。

〈サッカーのオリンピック日本代表が／ペ
ラルーシの代表チームと試合した／ペラ
ルーシのサッカーチームは／初めてのオリ
ンピック参加だと言う〉。

そして白井さんの働く牧場にも浪江町から
きている山羊がいるという。それを見ていた
家族は〈うちは子供が小さいので帰らないと
いう〉と書く。

〈原発は安全だと言いきる人たちよ／人間
の知識や技術では／放射能の汚染は止めら

れないのだ／福島第一原子力発電所は／
三十年後も放射能を出し続けている／それ
は事実として残る〉。

多くの人たちが共有している思いであるが、
書き残していくことも貴重なことだと共感す
る。詩評の主旨から離れるが、白井さんはサッ
カー少年だった。サッカーを題材にした小説
も書いている。また畜産の仕事をしてきた関
係で、その世界をあつかった小説も何篇か読
ませていただいた。(農民文学) 関係の本を
多数読んできた私も、白井三夫さんの小説の
世界も貴重な仕事だと位置付けている。「あ
とがき」に〈母の告別式の後、お清めの席で、
いつか直木賞を取りますと親類縁者の前で宣
言しました〉。その心意気で小説に詩作に励
んでもらいたい。

とにかく同じ会員の詩集出版は喜ばしいこ
とだ。

イベント報告

第五一回群馬県文学賞
受賞記念講演について

伊藤信一

群馬県文学賞受賞者による記念講演が、新
規企画として第五一回(平成二五年度)から、
受賞作品等のミニ展示とともに行われること
になりました。初回に当たる今年度は、平成
二六年三月六日(木)に群馬県立土屋文明記

念文学館において、五部門の講演がありました。以下講演会のように講演内容の一部を講演した立場から書かせていただきます。

当日は、私の個人的な事情で、開始予定時間の一三時三〇分には行けなくて、事前に講演順を最後にしていただくようお願いしました。各部門ごとに選考委員の講評が五分程度あり、その後、二五分を目安に話をするという進行計画でした。私が会場に到着したのは一五時頃で、短歌、俳句部門が終わって、児童文学部門が始まるというところでした。平日ですが、座席はかなり埋まっていました。

小説部門の後、一六時頃から詩部門が始まりました。選考委員の一人である川島完さんは、ドビュッシーの作品とそれ以前の音楽を対照させて現代詩の特質を論じ、その文脈の中で私の作品の傾向を説明してくださいました。

私の演題は「詩の周辺あるいは詩の成立」。受賞作品中の三編を含んで、これまでに書いた詩、計一一編を印刷し、事前に受付で配布していただいていたありました。与えられた時間は、あいさつというには長く、構成された深みのある講演の時間としては短いと思ったので、原稿を作らず、ミニアンソロジーを手にかりに、参加者の反応を見ながらその場の成り行きで話す心積もりで臨みました。

第一詩集の「梅の朝」、第二詩集の「ははのひに」という二編の短詩に触れて、一見単

純な構造のように見えながら読者にとってはそうではないのではないか、それに対して受賞作の短詩「学校の廊下」は言葉は複雑でも単純な構造であり感じたままたれ流した作品で、作者としては今読むと、作品として成立していると言いつれ切れない気がするという話。

ミニ展示でパネルにしていた「島の地図」。「寺山修司」を詩に登場させるのは不必要という議論も「東国」合評会ではあったが、これはアイコンで、マウスをあててここをクリックする読者を期待している。他の部分は不気味なくらい平易であり、引っかけられないと少なくとも読者としての自分は面白くない。もっともこの場合成功しているかどうかは微妙だ、という話。

「わからない」ことは価値ではない。が、誰にでもわかりやすいということに価値を置く文学観には抵抗がある。ピカソの絵は誰にもわかるのか？ 耳の聞こえない作曲家という物語にすがって無理矢理「わかった」＝価値があると思いたがらなくていいのではないか。間口の狭いものを否定しないスタンスが、文学、文化を考える上で重要なのではないかと、いった話など。

とりとめもなく話し、時間を見計らって唐突に終わりにしました。企画としては一年では終了しないでしょう。次年度の方の参考になれば幸いです。

年刊詩集第三十七集

原稿募集

締切日 七月三十一日(木) 必着

参加費 会 員 5000円

会 員 外 5500円

*但し、二頁を超える作品は、いずれの場合も一頁あたり2000円の追加となります。

形 式 見開き二頁(40字×40行)を基本とし、最初の五行は表題・作者名。

*行数オーバーの場合追加料金となりますのでご注意ください。

発 行 十一月発行

配 布 平成二六年度総会にて(2部)

*当日欠席で郵送を希望する方は、参加費に送料500円を加算して振り込んでください。

参加費振込先 郵便振替で左記へ。

口座番号 0011010485932

口座名義 篠木登志枝

*振り込み手数料は自己負担となります。

*年刊詩集分〇〇円・郵送料500円と明記のこと。

原稿送付先 郵送・FAX・メールで開始中

郵 送 〒377-0201 波川市上白井二三三三一

須田芳枝宛

FAX 0279(53)5718

メール taku_wan_1@yahoo.co.jp

*原稿はコピーしておいてくださると助かります。

「熱帯雨林と空っ風」

ポエトリー・リーディング×

バリ音楽 を聴いて

高田 芙美

平成二十六年三月三日(日) 午後七時

会場 サンガム(高崎中居町)

出演 くぼんぼん(新井隆人・國崎理惠)

ゲスト 宮田 恵(フラメンコ)

広瀬大志(ポエトリー・リーディング)

「このバスは中居町を通りますか?」

「中居町は・・・」と詩人のX氏似のすつき

りした顔だちのバスの運転手

交番でも聞いて、結局タクシーに乗った。

「サンガム?」そこで何があるんですか?」

「くぼんぼんの・・・」

暗い店の外でタバコをすっていたのは、あとから知ったのだけれど広瀬大志さんだった

店の中はアフリカ風のインテリア?

くぼんぼんというのはインドネシア語で蘭の

ことだそう。新井隆人さんがバリガムラン

奏者の國崎さんとユニットを組んだのは昨年

今日朗読する詩については、意味を越えた

ところで感じてもらえればと挨拶された。バリ

風にまとめたヘアスタイルと衣装の國崎さん

の瞳が宝石のよう・・・

詩の朗読とガムランの笛、太鼓のコラボ(両

面太鼓)が続く

口から出たら部屋だった/灯りはともらない
/ものはどんだめになつていった/ものはどんだめになつていった/ものはどんだめになつていった/ほくたちは買いに出かけなければならなかった/花粉はくるまの中にも溢れた/なぜならば/くるまも花だったから/ものはだんだんと/だんだんと/花になつていったから/ほくたちは買いに出かけたのだった

「花だった」抜粋

小さなシンバルのような(チェンチェンという)楽器とのコラボ、その音とともに、暗闇に金色の花粉がこぼれるようだ

そらは/そらだけは/決して見てはならないのだから(あさのそらより)、笛、フラメンコとのコラボ、はじめてフラメンコのステップを真近で見た、引き込まれるものがある。

國崎さんによる、まどみちおさんの心あたたまる詩の朗読、広瀬さんの迫力ある詩の朗読「激しい雨(だったから死んだ)」「場所」

詩は命がけだろうか

宮田さんが食べていたごはん(玉子かけ?)とみそ汁のみそがいい香りだったので、みそ汁だけをたのんだ。自家製のみそ? サンガムにはこんどは、駅から歩いて行き、又、おいしいみそ汁を味わいたい。

あすなる忌見聞録

福田 誠

去る四月十三日、第十三回となるあすなる忌が高崎の(公)あすなるで開催されました。その概要をレポートしたいと思います。以前は高崎駅近くの哲学堂等を会場としていましたが、昨年からの(公)あすなるを会場としての第二回目であります。うららかな春の日曜日の午後の行事でありました。

主催者に確認してはいませんが、小生が数えたところによるとざっと七十人近く、(公)あすなるの二階はほほいっばいとなりました。一階で営業中のカフェからコーヒの香りとヴィヴァルディの曲が二階に届く中、午後二時開会となりました。司会は田口三船さん、挨拶はあすなる忌発起人会代表の曽根ヨシさん。そして、経過報告ということで上毛新聞社論説委員長の藤井浩さんの報告がありました。当日配布された藤井さん編集の「第十三回あすなる忌資料」は大変貴重と思われる。特に崔さん自身が書いた「あすなる始末記」は興味深く読ませてもらいました。

講演は中村不二夫さんで、演題は「崔華國の国境の越え方」であります。中村さんの講演内容をまとめるのは能力のない小生にはとても難しく、限られた紙面でもありますが、心に残ったセンテンスを掲げ読者に推測してもらいたいと思います。「朝太郎や賢治のように五十年、百年経つても崔さん論を著す人

が出てほしい」「単なるナシヨナリズムでなく、民族とはひとつの摂理である」「国境を越えるにはキリスト教はよいツール」「崔さんはさらに晩年詩人というツールを得る」「いやーこれだけでは余計に誤解を招いてしまいますね。ごめんなさいね。」

来年生誕百年を迎えるにあたって「詩と思想」で崔さんの特集を組む予定だそう、今から楽しみであります。

中村さんの講演の合間に曾根さんが崔さんの作品「コリー・バンズ」「江」「相似性」を朗読してくれました。

その後は「Cおあすなろ」ならではのコーヒータム。そして次は、詩の朗読です。韓国語で李美子さんが崔さんの作品「江」と「逝く春を」を朗読し、その後志村喜代子さんと黒川初美さんが日本語で朗読してくれました。最後は、はるばる駆けつけてくれた方もいらつしやだったので、参加者のスピーチでした。それぞれが崔さんへの思いや自身の中でのあすなろを語ってくれました。お一人目は土曜美術社出版販売社長の高木祐子さん。次は、九州からお越しの本多寿さん、そして高崎出身の原田道子さん、さらに本県からは川島完さん。最後に曾根ヨシさんのスピーチで閉会となりました。

閉会後は恒例の豊田屋旅館での懇親会です。今回は都合が悪く参加できませんでしたが、今回は是非懇親会まで参加したいものであります。

大手拓次をしのぶ「薔薇忌」

第十七回開催の報告

磯貝優子

穏やかな春日、四月二十七日午後、大手拓次没後八十年、大手拓次研究会発足十五年を記念しての「薔薇忌」が開催された。

例年のように、墓前祭では、詩の朗読と薔薇の献花があり、語る集いでは、講演と小中学生、会員による詩の朗読により、約六十人の方々が参会して詩人をしのんだ。

「訳詩というレッスン」という講演は、愛敬浩一氏によるもので、人柄の温かさを思わせる話し振りで、拓次の世界をわかりやすく説明してくださった。

拓次は、早稲田大学在学時の明治四十三年からフランス詩の翻訳を始め、ボードレールの『悪の華』の作品を手掛けた。その訳詩を考える上で、拓次の後輩の学者である村上菊一郎の訳と比較しながら詳しく話された。

「信天翁」は、ボードレールが二十歳の時のインド洋の航海の詩で、自分を見詰めるにあほうどりのような詩人と孤独感を表現する。三連の二行目は、「彼は、をかしく醜いけれど、なほうつくしいのだ！」と訳しているが、村上菊一郎は「あの美しさはどこへやら、なんと笑止な見苦しさ」と訳す。美があるかないとの真逆の訳し方で、村上菊一郎の方が原詩に近いかもしれないが、詩的な拓次の訳に

ボードレールは救われているのではないかと述べられた。

次に、拓次が二回訳した「踊る蛇」を取り上げられた。ボードレールは、詩を生々しいものにした詩人であった。蛇はなまめかしいものとして扱われている。日本ではイメージがよくないため好まれないが、女性の身体にたとえ、肌の美しさはゆらめく星のように皮がさらさらすると表現され、杖の先であやされる蛇を踊るという。また、あまり賢くない女性のイメージとして、頭の小さい年若い象にたとえる。なまめかしく、鮮やかなイメージが二重、三重に重ねられる天性の詩人の生々しさを拓次はうまく表現している。村上菊一郎と比べると、拓次の訳は、日本語的でやわらかく印象深い。また、「る」の詠嘆の音がくり返されることでリズムがあり、詩的であるのに対して、村上の訳は、欧文訳的で、ほぼ倒置法がつかわれており、リズムがあまり感じられない。ひらがな、擬音語、擬態語を多用し、自在に自分の言葉で翻訳する拓次の訳詩は日本語としてもすばらしいとのことであった。

最後に「春の日の女のゆび」、「青い鐘のひびき」という拓次の作品に触れられ、指と魚のダブルイメージやかすかな響きの貴重さなどを話され、本物の詩と評価された。

講演後、地元の小中学生が堂々と朗読し、会員の方々も個性的な表現での朗読を行い、充実した時間が経過して閉会したことを報告する。

第二十二回

群馬詩人クラブ現代詩作品展

テーマは特にありません

会場 水と緑と詩のまち 前橋文学館 (二階)

会期 10月5日(日)～19日(日)

9:30～17:00まで
水曜休館 最終日は13時まで

参加費 五百円 お一人何点でも可

参加の有無を、同封の葉書で6月30日(月)までに返信してください。
*立体作品の展示台が少ないので持参できる方はよろしく願います。

搬入 10月4日(土) 9時～14時

搬出 10月19日(日) 13時～15時

10月20日も搬出可能

右記に搬入できない方は、搬入を他の会員に依頼されるか、10月3日の19時までに「様名まほろば」へ作品をご持参ください。また搬出の際、「ご都合がつかない方の作品は、一時的に「様名まほろば」で預かっていただけるといことですが、その場合、保管は10月20日(月)～10月26日(日)とさせていただきます。

朗読会 10月11日(土) 14時～17時

懇親会 10月11日(土) 17時30分～

懇親会参加費は四千元 場所は前橋市内を予定しています。ふるってご参加ください。

第二十五回 伊東静雄賞 作品募集

《趣旨》

諫早が生んだ詩人伊東静雄。独自の強烈な精神で、日本の詩界に足跡を刻んだ詩業を顕彰し、文学の振興と豊かな芸術文化の高揚に資するため、毎年優れた現代詩を示した詩人にこの賞を贈ります。

《応募方法》

現代詩 題名含め40行以内、未発表の作品で一人1篇のみ。(新聞・雑誌・同人誌・ホームページ・ブログその他メディアで既に発表したもの、および他の文学賞に応募した作品は除く) A4版400字詰め原稿用紙2枚以内(パソコン使用の場合は、A4版20字×20行の縦書きで印字のこと) 欄外もしくは余白に、郵便番号・住所・氏名(ふりがな)(筆名の場合本名も)・年令・性別・職業・電話番号を明記のこと。作品の返却はしない。応募料不要。応募者の個人情報、選考及び本賞に関する通知、発表以外には使用しません。

《賞》

伊東静雄賞 1篇

正賞 賞状 副賞 50万円

該当作品がない場合は、

奨励賞2篇 各25万円

《応募締切》

平成26年8月31日(日) 当日消印有効

《原稿送先》

〒854-0014 長崎県諫早市東小路町10-25

諫早市芸術文化連盟 伊東静雄賞係

《賞の選考および発表》

平成26年11月中旬(予定)。発表誌は市芸術文化連盟誌「諫早文化」第10号 27年4月発行 選評・佳作者氏名も掲載します。

《贈呈式》

平成27年3月29日(日)

第51回「菜の花忌」終了後、諫早市内で行います。

《選考委員》

田中 俊廣氏 高塚かず子氏

以倉 紘平氏 伊藤 桂一氏

平成26年4月1日

諫早市・諫早市芸術文化連盟・伊東静雄顕彰委員会

受贈詩誌御礼

*御惠贈感謝いたします。

島根県詩人連合会報 75

岐阜県詩人会報 2

岩手県詩人クラブ会報 86

茨城県詩人協会会報 17・18

島根県詩人協会会報 42集

萩原朔太郎研究会会報 78

詩界通信 日本詩人クラブ広報 66

静岡県詩人(静岡県詩人会報) 121

山形県詩人会報 158

山形県詩人会報 25

栃木県現代詩人会報 67

関西詩人協会会報 73

大分県詩人協会会報 139

長野県詩人協会会報 126

いちご通信(大分県詩人連盟会報) 9

みえ現代詩 93

埼玉詩人会報 74

三重県詩人会報 74

日本現代詩人会報 134

詩誌紫翠 29

大衆文芸ムジカ創刊号 丘のうえ工房ムジカ

個人詩誌「河」第二期 27～31 柳沢幸雄

青景色蛙御殿 木村和夫

裸心版 2014・4・10 こまつかん

(五月十三日現在 敬称略)

◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

編集に携わって三号になります。多くの方のご協力をいただいて、発行に漕ぎ着けていますが、前号は誤りを抱えたままの発行となってしまうました。今号では、担当者間でのチェックには念には念を入れましたが...。春のイベントも終わり、作品展・年刊詩集へと、活動も移してまいります。会員の皆様のご協力あつてのこの秋です。(提著 宏)